

8月1日現在の果実の肥大は「興津早生」、「大津4号」及び「青島温州」は平年より進んでいます。一方、「日南1号」は平年より肥大が遅れています。
極早生、早生温州は8月上旬、普通温州は8月中旬に仕上げ摘果を行いましょう！

1 令和4年7月の気象

令和4年7月の半旬別の気象を表1に示した。平均気温は第3半旬を除いて平年より高かった。月平均気温は25.6℃で、平年より1.0℃高く、前年より0.6℃高かった。

降水量は、第3半旬で72.0mm、第4半旬で91.5mmの降雨があり、それ以外では平年よりも少なかった。月合計の降水量は198.0mmで、平年の113%、前年の54%であった。

日照時間は、第2～第4半旬で平年より少なく、第1、第5、第6半旬で平年より多かった。月合計の日照時間は188時間で平年の105%、前年の91%であった。

表1 令和4年7月の気象（暖地園芸研究所）

半旬	平均気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	25.5	23.4	21.9	21.5	37.1	344.5	28	23	3
2	24.3	23.4	24.7	0.5	39.0	3.5	20	26	14
3	24.0	24.7	24.7	72.0	33.8	4.0	12	28	30
4	25.5	24.7	26.0	91.5	25.8	0	21	30	54
5	26.5	25.1	26.1	7.5	20.9	0	42	32	60
6	27.6	25.9	26.1	5.0	19.2	13.0	65	42	46
平均/計	25.6	24.6	25.0	198.0	175.8	365.0	188	179	207

※降水量については暖地園芸研究所内の観測機材が不調のため、アメダスデータ（館山市）を引用

2 果実及び樹の生育

8月1日における調査園の果実生育状況を表2に示した。横径は「日南1号」が4.4cm、「興津早生」、「大津4号」及び「青島温州」が3地区の平均でそれぞれ4.0cm、4.0cm、4.1cmであった。「日南1号」は平年比94%、前年比88%であった。「興津早生」は平年比、前年比ともに103%であった。「大津4号」は平年比105%、前年比98%であった。「青島温州」は平年比108%、前年比95%であった。

縦径は「日南1号」が3.7cm、「興津早生」、「大津4号」及び「青島温州」が3地区の平均でそれぞれ3.7cm、3.4cm、3.5cmであった。「日南1号」は平年比95%、前年比93%であった。「興津早生」は平年比109%、前年比112%であった。「大津4号」は平年比106%、前年比103%であった。「青島温州」は平年比109%、前年比100%であった。

果形指数は「日南1号」が1.2、「興津早生」、「大津4号」及び「青島温州」が3地区の平均でそれぞれ1.1、1.2、1.2であった。全般的に平年と同程度であった。

表2 果実の生育（令和4年8月1日）

品 種	調査地	横 径 (cm)			縦 径 (cm)			果形指数		
		本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
日南1号	暖地園研	4.4	4.7	5.0	3.7	3.9	4.0	1.2	1.2	1.3
	三芳地区	3.8	3.8	3.5	3.6	3.4	3.0	1.1	1.1	1.2
興津早生	千倉地区	4.0	3.9	3.9	3.5	3.4	3.4	1.1	1.1	1.1
	暖地園研	4.3	3.9	4.4	4.0	3.5	3.6	1.1	1.1	1.2
	平 均	4.0	3.9	3.9	3.7	3.4	3.3	1.1	1.1	1.2
大津4号	三芳地区	3.9	3.7	4.1	3.4	3.2	3.3	1.1	1.2	1.2
	千倉地区	3.9	3.8	3.9	3.3	3.2	3.2	1.2	1.2	1.2
	暖地園研	4.2	3.8	4.3	3.5	3.1	3.4	1.2	1.2	1.3
	平 均	4.0	3.8	4.1	3.4	3.2	3.3	1.2	1.2	1.2
青島温州	三芳地区	4.0	3.7	4.0	3.4	3.2	3.4	1.2	1.2	1.2
	千倉地区	4.0	3.8	4.3	3.3	3.2	3.5	1.2	1.2	1.2
	暖地園研	4.4	3.8	4.5	3.7	3.2	3.6	1.2	1.2	1.3
	平 均	4.1	3.8	4.3	3.5	3.2	3.5	1.2	1.2	1.2

各地点の各品種の値は40果の平均
果形指数は、横径／縦径

8～9月の栽培管理

(1) 摘果

極早生、早生温州は8月上旬、普通温州では8月中旬（粗摘果の1ヶ月後）に仕上げ摘果を行う。摘果程度は1果当り葉数が極早生温州は20～25枚、早生温州は25～30枚、普通温州は20～25枚とする。

着果が少なく果実が大玉である場合は、仕上げ摘果は行わずに収穫1ヶ月ほど前の樹上選果のみとする。

着果量が中程度の場合は間引き摘果を行い、小果、大果、内成り、すそ成り、奇形果、傷果などを優先的に摘果する。

着果が多く、粗摘果の際に枝別全摘果を行った樹では、着果させる枝についても小果、大果、内成り、すそ成り、奇形果などを軽く摘果する。

(2) マルチ資材の被覆

高品質果実の生産にマルチ栽培は有効である。被覆は、夏の乾燥期が終わり秋雨期に入る前の8月下旬、遅くとも9月上旬に開始する。土壌の乾きやすさや灌水設備の有無によって、開始時期や被覆面積を調節する。マルチの適地は、ゆるやかな傾斜地で日当たりや水はけが良く、風の影響が少なく、普段から高品質の果実が生産できる園地である。

(3) 主な病害虫の防除

1) かいよう病

本病は2次伝染を繰り返すので、薬剤で春梢に対する初期防除を徹底する。果実に対しては梅雨から果実肥大期を重点に防除し、その後は夏秋梢に対するミカンハモグリガの防除を行う。また、特に感受性の高い品種を栽培する場合には、園地の防風対策を行

う。ただし、銅水和剤はマシン油乳剤、デランフロアブルとの近接散布による薬害が起こりやすいので、2週間は散布時期をずらす。

2) 黒点病

枯枝が最も重要な伝染源となるため、生育期を通じ、枯枝の除去を徹底する。また、密植園の伐採、老木の更新など、各種要因により枯枝ができないような栽培管理が必要である。薬剤散布は、梅雨前の5月中下旬から開始し、以降、累積降雨量が250mm前後に達した時点で散布を行う。防除は、9月上中旬まで継続して行う。

3) ミカンサビダニ

6月頃から9月まで果実を加害する。被害が拡大する恐れがあるため、果実1～2個の被害を見たら直ちに防除する。特に梅雨明け直後に行う防除が重要である。樹冠の内部・上部など薬剤のかかりにくい部分に発生が多いため、摘果時に注意深く見る。黒点病の防除に用いられるマンゼブ剤により同時防除が可能だが、多発した場合は登録のある殺ダニ剤の使用が有効である。

4) ミカンハダニ

果実や葉を加害する。増加期の6月にはマシン油乳剤(97%)150倍液を散布する。この時期の判断は、寄生葉率30%を目安にする。また、9～10月に多発するので、秋期には寄生葉率20%を目安に殺ダニ剤を散布する。

5) ミカンハモグリガ

通常の結果樹では徒長枝は冬季にせん除するので、本虫の被害を受けても防除の必要はない。しかし、激発した場合や、隔年結果樹、高接ぎした樹や苗木、幼木など、新梢を利用する樹では防除が必要である。新葉展開初期から2～3回、殺虫剤を散布する。

6) チャノキイロアザミウマ

成虫の発生時期である5月中旬、6月中旬に殺虫剤を散布する。本種は防風樹として利用されるイヌマキやサンゴジュでも増殖し、成虫の羽化時期に刈り込むとカンキツへの飛来が多くなるため注意が必要である。

※極早生温州等、収穫の早い品種については農薬の使用から収穫までの日数に注意をする。

※農薬の登録内容は変更になる場合があるため、農薬使用の際は最新情報を確認する。

なお、表の数値は表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計は一致しない場合があります。

《 生育情報の問合せ先 》 千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室

電話 0470-22-2961※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。
<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>